確認テスト

名前:

日時:

問１．禅問答とは禅宗における修行方法の一種であり、　　で交わされる一連の問答や動作のやり取りである。

１．禅の修行者どうしの間

２．禅の実践者と弟子との間

３．禅の指導者の弟子どうしの間

1. 禅の指導者と弟子との間

問２．禅僧たちが行った禅問答を後の修行者たちのために記録したものを　　と呼ぶ。

１．公案（こうあん）

２．言行録（げんこうろく）

３．経典（きょうてん）

1. 使徒行伝（しとぎょうでん）

問３．禅問答において、修行者たちは師匠からの問に適切に答えることによって、禅の真理を　　ことができる。

１．知る

２．悟る

３．理解する

1. 実感する

問４．　　について「禅問答のような話だ」と形容するように、禅問答は理解するのが極めて難しい。

１．退屈な話

２．荒唐無稽なたとえ話

1. 突拍子もない話

４．意味の分かりにくい話

問５．『禅問答と悟り』は世界的な仏教学者　　の著作である。

１．西谷啓治（にしたにけいじ）

２．中村元（なかむらはじめ）

３．久松真一（ひさまつしんいち）

1. 鈴木大拙（すずきだいせつ）

問６．『禅問答と悟り』では、禅問答の特色について、「知的ではない、論理的でも、説明的でも、解釈的でもない。また、単なる啓蒙的でもない。教訓的でもない。俗に言う「　　」的である。」と説明している。

１．体当たり

２．手当たり

３．八つ当たり

1. 場当たり

問７．『禅問答と悟り』では、禅問答のやりとりの特徴について、「一問一答でなければ、発展しても二、三度の往復あるにすぎぬ。知的でないから発展性がない。従って　　とはならぬ。」と説明している。

１．議論

２．対話

３．独話

1. 会話

問８．「不立文字」とは真理は　　や文字によっては伝えきることができないという意味ある。

１．数式

２．記号

３．発話

1. 言葉

問９．「教外別伝」とは真理は文字によって書かれた経典によってではなく、　　直接伝わるという意味である。

１．人から人へ

２．心から心へ

３．魂から魂へ

1. 体から

問１０．「不立文字」・「教外別伝」の精神が、禅問答を　　によって理解することを難しくしていると考えられる。

１．体感的な感覚

２．創造的な思考

３．論理的な思考

４．直感的な感覚

問１１．禅問答「南泉斬猫」は、禅仏教における公案集である　　に収められている。

１．維摩経（ゆいまきょう）

２．歎異抄（たんにしょう）

３．中論（ちゅうろん）

４．無門関（むもんかん）

問１２．子猫を巡る弟子たち争いの様子を見ていた南泉和尚は、子猫の首をつかんで、　　を突きつけた。

１．草刈りの小刀

２．鋭い針

３．草刈りの鎌

４．鋭い小刀

問１３．南泉和尚は子猫を巡る弟子たち争いの場において、次のように発言した

「　　を悟るにはどうしたらいいかを言え。言えるならば、この子猫を助けよう。そうでないなら、斬り捨てよう。」

１．無常の真理

２．仏法の真理

３．四聖諦の真理

４．禅の真理

問１４．南泉和尚は、一番弟子の趙州に子猫を巡る弟子たち争いの出来事について、　　に話した。

１．当日の朝

２．当日の深夜

３．当日の夕方

４．翌日の夕方

問１５．南泉和尚は趙州が帰った後、「ああ、お前がその場にいてくれたら、　　」と嘆いた。

1. 子猫も逃げなかったのになあ

２．弟子たちも争わずにすんだのになあ

３．弟子たちも助かったのになあ

４．子猫も助かったのになあ

問１６．小説　　では、登場人物が禅問答『南泉斬猫』について解釈するシーンがある

１．仮面の告白

２．檸檬

３．吾輩は猫である

４．金閣寺

問１７．問１６で選択した小説では、子猫を巡る弟子たち争いの場における南泉和尚の行為は次のように解釈されている。

「　　によって、猫の首を斬り、一切の矛盾、対立、自他の確執を断ったのである。」

１．非情の実践

２．無意識の欲求

３．無情の行為

４．無意識の衝動

問１８．問１６で選択した小説では、南泉斬猫に登場する子猫は　　の根源と解釈されている。

１．愛情愛着

２．喜怒哀楽

３．妄念妄想

４．安全安心

問１９．問１６で選択した小説では、南泉和尚の一番弟子である趙州の行動について、次のように説明されている。

「泥にまみれ、人にさげすまれる履というものを、　　によって頭上にいただき、菩薩道を実践したのである。」

１．限りない寛容

２．不屈の精神

３．限りない忍耐

４，無私の心

問２０．問１６で選択した小説では、南泉和尚の一番弟子である趙州の「履いていた草履を頭に載せて帰っていく」という行為は、　　の象徴と解釈されている。

１．仏陀としての悟り

２．一禅者としての修行

３．阿羅漢としての悟り

４．菩薩としての修行